

地球環境を考える

—「地球憲章」成立の過程を経て—

広中 和歌子

聞き手：佐多保彦 株式会社東横機質 代表取締役社長



佐多：広中さんご夫妻と初めてお会いしたのは、まだ私が20代のころで、ボストンのご自宅を日本山妙法寺のお坊さんのお供でお訪ねしたことがきっかけでした。その後、広中さんが翻訳出版された『40歳の出発』(*1)にも大変考えさせられるものがありました。

広中：私は当時夫(*2)の仕事の関係もあって長くアメリカに住んでおり、当然主婦として普通の生活があったわけですが、子育ても一段落し、さてこれからなにをしようかとふと考えたときに、この本に出会ったのです。人生というのは、学校に行き就職して結婚をして、そして子供を産んで家を買ってと、段々と成熟に近づき、そして人生をある程度上りつめてしまったりあとは下り坂しかない、そのような考え方はおかしいのではないかとという趣旨の本でした。むしろ、ある程度上りつめたからこそ、そこで一度自分の人生をギアシフトしてみる、そうすればまた違う景色が見えてくるのではないかと。私はちょうどそういった不安を抱えてもやもやしている時期でしたから、自分の問題としてこれを受け止めました。自分もこれからでもギアシフトできるのではないかと考えたのです。

佐多：でも、まさか政治家になられるとは思いませんでした(笑)。

広中：周囲も驚いたと思います。ただ、私は終戦を経験しているし、長くアメリカに住んでいたので、政治がとても大切なものだという意識はずっとありました。政治の在り方によって、国民の運命も変われば、国の盛衰も決まってしまう。そのような重要なポジションにお誘いいただいたことは、自分にとって大きなチャンスだったと思います。

佐多：おいくつのときに正式に政界入りされたのですか。

広中：既に52歳になっていました。折しも日本では高度経済成長期がピークに達し、これからどういう方向に進んでいこうかと模索している時期でもありました。そのような中で、私にはなにができるだろうかと考えたときに、環境問題について大きな関心を持つようになったのです。既に有機水銀による水俣病や四日市の喘息などの問題については、様々な対応策が検討されていました。私はどちらかというとアレックス・カー氏(*3)が指摘されているように、住環境の破壊という観点から環境問題に関心を持ち始めたところがあります。また、ちょうどグローバルな問題として環境破壊が取り上げられるようになってきたところで、ゴルバチョフ元ソ連邦大統領が環境問題を通して西欧と対話し、相互に理解を深めようとする姿勢を

お持ちになられたことも一つのきっかけとなりました(*4)。

佐多：そして「地球憲章」作成の作業に関わることになられたわけですね。「地球憲章」について少しお話しいただけますか。

広中：環境問題に対して、条約や法令だけでは不十分と考え、人間の考え方や行動そのものを変えるような哲学、倫理観、行動規範が必要だという考え方に立って成立したものです。1987年に、ブルントラント委員会の報告書「われら共通の未来(Our Common Future)」の中で「地球憲章」の作成が呼びかけられました。その後、ブラジルのリオで地球サミットが開催され、「持続可能な発展」が大きなテーマとなりましたが、そのときは発展途上国と先進国の思惑にずれが生じ合意には至りませんでした。しかし、94年に、オランダのルベルス首相の支援のもと、ゴルバチョフ元ソ連邦大統領とリオサミットで事務局長を務めたモーリス・ストロング氏を中心に、世界各国から有識者が招かれ、オランダのハーグで会議が開催されたのです。私は環境庁長官の任期を終えたばかりで時間もあったので、出席することになり、そして最終的には地球憲章起草委員会のメンバーとして「地球憲章」を作成する作業に加わることになりました。世界各地から寄せられた意見を集約しまとめ上げ、2000年6月ようやく「地球憲章」(*5)は正式に発表されることになったのです。現在ではそれを日本に広めるための活動を積極的に行っています。

佐多：PUGWASH会議(*6)では核廃絶問題に取り組んでいます。そのような問題も「地球憲章」に関わっているのでしょうか。

広中：「地球憲章」というと、環境問題だけを取り上げているように思われるかもしれませんが、実際は平和の問題から人種差別、女性の権利、貧困の解消など、扱っている課題は非常に多岐にわたっていますので、広義の意味では核廃絶の問題も関わってきます。つまり、発展途上国も含めて、先進国がこの地球上で平和に公正に生きるためになにをすべきなのかということを重点的に述べているのです。いわゆる道徳教育のようにとらえられてしまうと反発を買うかもしれませんが、「地球憲章」というのはどちらかというと人間として持つべき価値観、つまりある意味生きるための基礎のようなものなのです。自分の心の中に取り込んで、日々の行いなり、社会の在り方なり、国の在り方なりを考える際に活かしていくことができればよいのではないかと考えています。

東京生まれ。57年、お茶の水女子大学教育学部英文学科卒業後、米國に留学。63年、ブランドイース大学文化人類学修士課程修了、87年同大学より名誉博士号受賞。約20年の米国生活の後、帰国後は教育、文化、女性の社会参加などの分野で、講演、対談、翻訳、エッセイなどで広範囲に活躍。86年に参議院議員として初当選し、93年より環境庁長官（細川内閣）、99年より民主党副代表を歴任。数学者広中平祐氏と結婚、一男一女の母。著書に『ふたつの文化の間で』『政治って意外とおもしろい』、翻訳に『40歳の出発』『ジャパン・アズ・ナンバーワン』『網と武士』など多数。



佐多:広中さんもご存じのように、地球環境問題の上で一番の公害はまさに「人間」であると(笑)。人間がいなければ、地球はさぞかし静かでバランスのとれた惑星でしょうね。

広中:「地球を大切にしましょう」なんて言いますが、地球はこれまでこれからも人間がいなくてもずっと存在していく。でも人間は地球がなければ存在できませんよね。しかも何千万とある種の中のたった一種の生き物である人間が、地球をめっちゃくちやにしているわけです。人間というものが頭と心のある動物である以上、自分以外の全ての存在に思いやりを持たなくてはならないと思うのです。

佐多:広中さんが関心を持たれているという住環境の問題に戻りますが、アレックス・カー氏の著書『美しき日本の残像』の前半部分に書かれているように、日本人に日本の風景写真を見せると「美しいですね」と言うそうです。しかし、一つ一つ、この看板はどうですか、この電線はどうですか、この電信柱はどうですかと指摘していくと、「ああ、確かに言われてみると汚い国ですねえ」という反応が返ってくるそうです。日本人はイマジネーションというか、ある種の「すりこみ」のように日本は美しい国だと思いこんでいるようです。環境問題に対して、日本は他の先進国と比べるとまだまだ教育も行き届いていないし、特にヨーロッパ各国の環境に対する厳しい姿勢を見ると、どうしてこのような問題に対して先駆けのできる国になれないのだろうと複雑な気持ちです。

広中:私は1980年ごろにアメリカから帰ってきたときに、逆にこの国は「汚いなあ」と感じました。自分の土地であればなにを建てても構わないと言わんばかりに、街全体の調和がとれていないのです。戦前のことを全てよいなんて全く思っていませんが、戦前の日本人はそれこそ向こう三軒両隣に配慮して全体のことを考えていたのではないのでしょうか。それが戦後は戦前を全て悪いと否定することから始まって、その結果残ったものがエゴや物欲だったのではないかと。それが高度経済成長の原動力にもなったのですが、どうも行き過ぎてしまったのではないかと。そのような時代の曲がり角の時期に帰国したせいか、政治の世界に入ったときに一番気になったことが住環境と教育の問題だったのです。また、否応なしに日本が成熟社会に入っていく上で、いわゆる「衣食住」ではなく「医職住」を通して日本人がバランスのとれたゆとりや豊かさを感じられるライフ

スタイルを持てるようなシステム作りが必要だと、強く感じています。

私の実家は世田谷の祖師谷大蔵にあったのですが、小さな農道をコンクリートで埋めて自動車を通れるようになった。当然自動車は道いっぱいに通るので、母が散歩をしていると自動車とすれ違うときは堀に張りつくようにしなくてはならないとよくこぼしていました。自分勝手な国というか、規制に関しては生活者を中心とした視点が欠けているというか……そういう意味で、私のような普通の主婦を経験した人間が政治の世界に入る意味はあるのではないかと、自分では思っています。

佐多:東京都知事の石原氏が「ディーゼル規制」に乗り出すなど、一面では評価もしているのですが、最近街にカメラをたくさん設置しろとおっしゃっているでしょう。犯罪防止上必要ということのようですが、しかし私にはあれはプライバシーの観点が全く欠けているとしか思えないのです。

広中:そういえば、この7月に長崎県で男児が殺害されるという事件が起こりましたよね。私はあれで日本にはいかに多くのカメラが設置されているのが初めて気づきました。カメラのお陰で犯人が見つかったのだからと肯定されてしまう側面があるのかもしれませんが。

佐多:欧米ではあのようにカメラを設置して無断で写真を撮ることは人権違反なのです。国家の権利も大切ですが、個人のプライバシーというものが国では人権の観点からもっと真剣に検討されるべき課題だと思っています。だから、私はこれをぜひ政治問題として取り上げて欲しいと期待しています。環境面からいっても、至るところにカメラがあるなどというのは異常事態ではないでしょうか。

広中:そうですね。私も住環境の問題について、引き続き真剣に考えていかなくてはと思います。これからも佐多さんのような市民の方から色々な意見を聞かせていただきたいと思います。

(※1) 原題『Shifting Gears』オニール夫妻著・広中和歌子訳 現在、絶版。

(※2) 数学界のノーベル賞といわれるフィールズ賞を受賞した数学者の広中平祐氏。当時ハーバード大学教授。前山口大学学長。

(※3) 著書『美しき日本の残像』(新潮社)で1994年に外国人初の新潮学芸賞を受賞。

(※4) リオサミットでグリーンクロス構想をゴルバチョフ氏が提唱し、翌年グリーンクロスインターナショナル(GCI)が発足。ゴルバチョフ氏が初代会長に就任した。グリーンクロスジャパン(GCJ)公式サイト <http://www.gcj.jp/index.htm>(日本語)

(※5) 地球憲章委員会本部公式サイト <http://www.earthcharter.org/>(英語)

(※6) PUGWASH会議公式サイト <http://www.pugwash.org/>(英語)